502.9
Y75

開發資料
第五輯 横濱新市域に於ける工場適地

横濱市經濟部編

始

917
24

横濱新市域に於ける工場適地

横濱市經濟部

502.9
Y75

東京帝國大學圖書之印

目次

⊙はしがき……一
⊙新横濱の生産背地はどこにある……二
⊙工場適地の廣さ……四
⊙立地條件……八
道路條件……八
動力及手條件……三
水利狀況……五
營力供給條件……七
⊙地價及地代……三
⊙工場適地を求められる方々へ……五

東京帝國大學圖書之印

917
248

はしがき

横濱市の發展――即ち昨日の横濱から明日の横濱への移行は、單に市地域の膨脹や、市人口の增加と言つた樣なもので計るべきではありません。何か市を特質づける又性格づける本質的の發展で計らねばなりません。然らば横濱市の本質的發展は何かと言へば、嘗ての中繼貿易港から生産貿易港へと轉換した場合を言ふべきでありませう。

已に横濱市は「工業立市」を市是として近來急激にその發展を示して參りましたが、從來中繼貿易港であつたが爲に、その損な影響を直接に受ける樣な問題が多々あつたのであります。

かくして工業立市の市是が愈々その重要性を高め來つた所以であり、その市是の强化確立には、工業立地に適する生産背地（ヒンターランド）を求める事の緊急性が最前面に押出されて來た所以でもあります。

已に市是に基いて開發せられて來た舊市域の工業地帶は、今日未だ必ずしも飽和されたとは言へませんが（この點に關しては當經濟部開發資料第二輯「横濱市内に工場適地を求めたい人々へ」を御參照下さい）近時喧しく論ぜられて來た國防的見地より

する國土計畫で採り上げられてゐる集積工業地帶の分散と言ふ點から見ても横濱市はその膨脹した新市域に生産背地（センターランド）を開發せしめねばなりません。

先般本市に於て施行致しました土地調査の結果、新市域に於ける工業地域たり得るものは二、九八〇、〇〇〇坪の廣大なる面積を有するものでありますが、前述の樣な諸要因から更に本市經濟部に於きましては昭和十六年春本地域に付詳細な土る地調査を施行致しまして、その内多少の施設を加ふることにより工場適地たり得るもの二、九八〇〇〇〇坪を撰定することが出來たのであります。

本パンフレットは此の工場適地候補地の土地事情を總括發表したものであります。之により企業家諸彦へ、その工場立地上の參考資料たり得れば、その目的は達せられたものと言へませう。

尚本調査は、横濱市立横濱商業專門學校經濟研究所の所員教授、學生の協力により完成されました。

新横濱の生産背地はどの方面にあるか

横濱の新市域内の工業立地の可能性を有すると見られる地域は、次の如くでありませう。

横濱驛を要（かなめ）として、放射狀に出てゐる交通機關の沿線を眺める時、その一本一本の交通線に沿ふて工場適地たり得る地域が發見されるでありませう。（第一圖參照）即ち

1 東横電鐵沿線に於ける
　A、太尾——B、綱島の地域
2 省線横濱線沿線に於ける
　C、小机——中山——D、長津田の地域
3 神中鐵道沿線に於ける
　E、二俣川——二ッ橋——F、瀨谷の地域
4 湘南電鐵沿線に於ける
　G、富岡——H、金澤の地域
5、東海道線沿線に於ける
　I、戸塚一帶の地域

右の諸地域内に多く介在してゐる空地なり、田畑地なりが果して工場を立地せしめ得る適地なりや、否やを現地踏査により檢討したのが今回の調査であります。

以下に調査により得られた右諸地域の工場地としての適性—工場立地性を展開させ

て見ませう。

（注意）中山町の工場立地性については、當經濟部「開發資料第三輯」「横濱新市域に於ける工場適地中山町附近」を御參照下さい。

工場適地たり得る地域の廣さ

上に述べた五方面の各地域に存在する適地候補の延坪數は、一六三個所約三百萬坪と言ふ尨大な廣さに上つてゐます。即ち、第一表に見られる如き内譯を持つてゐます

（第一表）

方面	地域	空地廣さの最低—最高	個所數	延坪數
東横線沿線	A、太尾	五〇〇坪—一五〇、〇〇〇坪	三六	一、〇二三、五〇〇坪
	B、綱島（日吉ヲ含ム）	三〇〇坪—二五、〇〇〇坪	二一	四〇六、七六〇坪
	計	三〇〇坪—二五、〇〇〇坪	五七	一、四三〇、二六〇坪
省線横濱線沿線	C、小机	一、七〇〇坪—一〇〇、〇〇〇坪	一七	四九六、八〇〇坪
	D、長津田	五〇〇坪—三五、〇〇〇坪	一一	二一八、三〇〇坪
	計	五〇〇坪—一〇〇、〇〇〇坪	二八	七一五、一〇〇坪
神中線沿線	E、二俣川	五〇〇坪—一五、〇〇〇坪	一八	七九、九〇〇坪
	F、瀬谷	六〇〇坪—九、五〇〇坪	二一	四一七、二五〇坪
	計	五〇〇坪—一五、〇〇〇坪	三九	四九七、一五〇坪
湘南線沿線	G、富岡	三〇〇坪—二五、〇〇〇坪	一三	六七、七四〇坪
	H、金澤	四、五〇〇坪—八、二五〇坪	三	二〇、七五〇坪
	計	三〇〇坪—四〇、〇〇〇坪	一六	八八、四九〇坪
東海道線沿線	1、戸塚	一、五〇〇坪—二一、〇〇〇坪	二三	一七八、〇〇〇坪
以上總計			一六三	二、九〇九、〇〇〇坪

の如くになります。

適地の坪數別の分類

右の如く一六五個所二、九五六、〇〇〇坪の各適地候補を廣狹の大小により分けて見ますと第二表の如くになり、各地域の廣さの特性が出て參ります。

（第二表）

方面	地域	500坪以下	500坪～1,000坪	1,000坪～2,000坪	2,000坪～3,000坪	3,000坪～5,000坪	5,000坪～10,000坪	10,000坪～15,000坪	15,000坪～20,000坪	20,000坪以上
東横線沿線	A、太尾	個所一				個所二	個所四	個所三	個所八	個所一八
	B、綱島（日吉ヲ含ム）	四	四	—	—	一	五	一	—	六
	計	五	四	—	—	三	九	四	八	二四
省線沿線	C、小机	—	—	一	—	一	四	四	—	七
横濱線	D、長津田	一	—	—	—	一	四	四	二	三
	計	一	—	一	—	二	八	八	二	一〇
中線沿線	E、二俣川	一	一	三	五	六	一	一	—	—
	F、瀬谷	—	二	五	一	二	六	—	—	五
	計	一	三	八	六	八	七	一	—	五
神線沿線	G、富岡	三	一	二	一	一	四	—	—	—
南線沿線	H、金澤	—	—	—	—	一	二	—	—	—
	計	三	一	二	一	一	六	—	—	一
湘南線沿線		一〇	八	一三	九	二三	三一	一七	一〇	四二
東海道線	I、戸塚	—	—	二	二	八	五	四	—	二
沿線										
總計										

右より見られますことは、各地域を通じて、何れも三、〇〇〇坪以上の適地候補の多いことで、全個所の四分の一が三、〇〇〇坪以下で四分の三が三、〇〇〇坪以上、一〇、〇〇〇坪以上のもの丈けでも四割以上を占めてることが分ります。

各地域の大凡の特質を廣さと言ふ點丈けで擧げて見ますと

大規模工場向適地の多いのは
太尾、小机、瀬谷、が擧げられ、
中規模工場向適地の多い地域としては
綱島、長津田、二俣川、戸塚、金澤が擧げられ、
小規模工場向適地の多い地域としては、
富岡及び綱島が擧げられませう。
さて之等の諸地域の各個所が工業立地上必要の諸條件——道路の條件、動力の條件水利の條件、勞力の條件、交通の條件、そして價格の條件等がどんなに具備されてゐるか、について以下に示して見ませう。

立地條件

道路條件

適地候補の諸地域は、成程交通機關の沿線にありますが、大量の材料や製品の輸送に際しては、必ずしもこの交通機關は、十分に利用出來ません。横濱線と、東海道線が貨物輸送線として役立つ外他の各線の貨物輸送量は今の所では、まづ小さいものとし

第一図 昭和十六年四月十九日 横鎮第六一号ノ六八ノ二許可濟

工場適地関係位置及幹線道路網要図

が言へません。

茲に於て自動車路（トラック）に十分考慮を拂ふ必要を生じて來ます。

今各方面各地域に通ずる主要トラック幹線道路を擧げて見ますと、（第一圖參照）

東横線沿線

通稱〔產業道路〕三號幹線道路と言はれてゐる幅員二〇米鋪裝トラック道が東京市內——丸子——住吉——日吉——綱島——太尾——菊名——東神奈川を連絡して、動脈的幹線をなし、之に幅員一〇米の通稱溝之口——鶴見縣道が綱島に於て直交してゐます。

横濱線沿線

〔川和街道〕と通稱される幅員二〇米の鋪裝四號幹線が東神奈川——六角橋（茲にて三號幹線と連絡する）——岸根——を經て小机に至り、更に鶴見川左岸地區を川和方面へ延びてゐます。本幹線は川和附近より分岐して、中山町を連絡し、中山町よりは、横濱線西側に沿ふて、一〇米トラック道が長津田へと走つてゐます。

長津田は通稱厚木大山街道——幅員約一〇米鋪裝トラック道に沿ひ、東すれば溝之口を經て東京方面に、西すれば下鶴間——座間を經て厚木に連絡してゐます。前述の如

く、隣接工業適地中山町へもトラック道あり、又下鶴間との中間、辻にて八王子往還と交叉して横濱程ヶ谷方面及び原町田、八王子に連絡し、下鶴間より南下すれば、瀬谷を經て戸塚、藤澤へと連絡します。

神中線沿線

程ヶ谷より出發してゐる八王子往還即ち六號幹線道路は（現在は幅員一〇米内外ですが、目下二〇米幅員の鋪裝路に改修中です）鶴ヶ峯に於て西折して、二俣川——三ツ境——二ッ橋を經て厚木へと延び、二ッ橋にて、下鶴間——瀬谷——戸塚トラック道と交叉してゐます。

湘南線沿線

横濱市内——杉田——富岡——金澤——追濱——横須賀を連絡する幹線は幅員二〇米の鋪裝道路です。

東海道沿線

申すまでもなく、國道東海道が戸塚地域を南北に縦斷してゐます。又地域の北部柏尾より北西に折れたトラック道は、上矢部——阿久和を經て二ッ橋——瀬谷——下鶴間に至り之より東して八王子、溝之口に、西して厚木に延びてゐます。又、地域の中央より西折したトラック道は、中田——長後を經て、厚木へと延び、又地域の中央を貫流する柏尾川の左岸に沿ふて延びてゐるトラック道は大船を經て鎌倉へと續きます

以上を圖示したものが第一圖です。

かくして以上の諸地域は何れも至便な幹線道路網により各地に又相互に至便に連繋されてゐる事が分りませう。

ところで茲に問題となるのは、各地域の各個所が、之等諸幹線と如何なる關係にあるかと言ふ事です。之に就ては次の第三表がその回答を與へて呉れるでせう。

（第三表）

方面	地域	100米以下	100米～200米	200米～300米	300米～500米	500米～1000米	1000米以上
東横線沿線	A、太尾 B、綱島（日吉ヲ含ム） 計	個所 一六 一四 二〇	個所 二 — 二	個所 一 一 一	個所 三 一 四	個所 七 三 一〇	個所 五 — 五

方面	地域	三、三〇〇ボルト動力線配備		二二〇ボルト動力線	
		配備あり	配備なし	配備あり	配備なし
	配電端より受電端までの最高距離	同上平均距離			

（第四表）

右によりまして、全候補個所中の約八割近くが幹線へは五〇〇米以下で出られる事が分ります。そして一〇〇米以下と言ふ短距離で出られるもの丈けでも約六割を占めてゐると言ふ事實は候補個所をして、愈々輸送便の條件を有利づける事となりませう

動力入手條件

本調査の對象となつた諸地域は、大都市の近郊である爲め遠距離送電線は、何れの個所をも通つてをり又變電地點（サブステーション）ともなつてる地域ですが、此程度では電氣化學工業の如きものの立地には便ですが、一般工業の立地には三、三〇〇ボルト程度の動力線乃至は二二〇ボルト程度の低壓動力線の配備如何が問題となります。

又動力の配線は近頃の如き資材難の時代には最寄の配電端より工場受電端までの距離も問題となります。此等の點についての資料を次の第四表で參考に供します。

適地候補個所附近に於ける動力配備狀況

總計	東海道線	湘南線沿線		神中線沿線		横濱線方面	
	1、戸塚	H、金澤	G、富岡	F、瀬谷	E、二俣川	D、長津田	C、小机
		計		計		計	
九個所六	一五	九	三	二六	一五	一六	八
一個所一	一	—	—	七	二	一	一
八個所	一	—	—	三	三	三	一
一個所三	一	四	四	一	一	三	二
二個所七	六	二	二	三	三	六	六
七個所	—	一	一	—	—	一	—

東横線沿線	A、太尾	個所三二	個所一、	二〇〇米—七〇〇米	個所二二	個所一四
	B、綱島（日吉ヲ含ム）	一八	三	五〇〇米	五〇米—一〇〇米	二〇	一
計		五〇	七			四二	一五
横濱線沿線	C、小机	一七	—	八〇〇米	三〇〇米—七〇〇米	一七	—
	D、長津田	一一	—	三〇〇米	五〇米—一〇〇米	一一	—
計		二八	—			二八	—
神中線沿線	E、二俣川	一八	—	一〇〇米	二〇米—五〇米	一八	—
	F、瀬谷	一〇	一一	五〇〇米	五〇米—二〇〇米	二〇	一
計		二八	一一			三八	一
湘南線沿線	G、富岡	六	七	三〇〇米	三〇米—一〇〇米	七	六
	H、金澤	三	—	一五米	一〇米—一五米	一	二
計		九	七			八	八
東海道線沿線	I、戸塚	二二	一	六二〇米	二〇米—一〇〇米	一九	四
總計		一三七	二六			一三五	二八

右の表で見る如く動力配備の無いもの（嚴密に言へば配電端の稍遠いもの）は二割以下でまづ動力入手には不便はないと見るべきでせうし、大部分の個所は五〇——二〇〇米の程度の配線で受電可能と言ふ事になります。

水利狀況

工業立地條件の一としての水利條件は、各方面各地域を通じて、例へば大きい河川等の無い地方の事とて、大量に水を要する工業の立地には不向きですが、普通の機械工業、輕化學工業等には少しも不自由はありません。舊市域附近の地域には多少上水道の便がありますが、その以外の地域にては豐富な井水に惠まれ、現在井戸の無い所にても、鑿井は可能であります。鶴見川流域方面にては鶴見川を主流とする小河流が多く存在して、小規模の工業用水源を構成してゐます。排水に關しては何分下水道の設備なきことゝ、平坦地形の多いとの關係から決して良好なりとは申されません。

次の第五表にその資料を示しませう。

（第五表）

方面	地域	水道の配備 有	水道の配備 無	井戸の配備 有	井戸の配備 無	鑿井能不能 可能	鑿井能不能 不能	小河流の有無 有	小河流の有無 無	排水の良否 良	排水の良否 否
東横線沿線	A、太尾	一六	一八	七	二八	三六	—	二四	一一	—	三五
	B、綱島（日吉ヲ含ム）	—	二一	一七	四	一九	一	一二	九	—	二一
	計	一六	三九	二四	三二	五五	一	三六	二〇	—	五六
横濱線沿線	C、小机	一七	—	一六	—	一七	—	一五	二	—	一七
	D、長津田	—	一一	一一	一	一一	—	一一	—	—	一一
	計	一七	一一	二七	一	二八	—	二六	二	—	二八
神中線沿線	E、二俣川	—	一八	一八	—	一八	—	一八	—	—	一八
	F、瀬谷	—	二〇	一七	四	一九	一	五	一六	—	一九
	計	—	三八	三五	四	三七	一	三三	一六	—	三七
湘南線沿線	G、富岡	二	一一	五	八	一〇	三	六	七	三	一〇
	H、金澤	三	—	一	二	三	—	三	—	—	三
	計	五	一一	六	一〇	一三	三	九	七	三	一三
東海道線沿線	I、戸塚	二	一八	二三	—	二三	—	一四	九	二	二一
總計		四〇個所	一一七個所	一一五個所	四七個所	一五六個所	五個所	一一八個所	五四個所	五個所	一五五個所

上表で見られる如く、先づ「工業用水」としての條件は及第と言ふことになりませう。

勞力供給の條件

戰時下の今日、勞力不足は都鄙を通じての傾向ではありますが、大都會は依然として勞力の供給源として絶對的の立場にあります。從つて大都市近郊の本調査地域の工場の要求する勞力の供給には必ずしも大なる困難は感ぜられないのであります。

本調査に於ける諸地域の大部が農業地帶にある爲、所謂農閑餘剩勞力の有無の如何が考慮せられますが、今日の情況下に於ては、近郊の蔬菜農に於てすらも勞力不足ですから餘剩勞力などは期待し得られません。しかし乍ら都市の膨脹と共に、近郊農業地域は漸減的傾向にありますから、農業の轉換による勞力の生じて來るのが考へられます。かくして本調査の諸地域にあつても此種の勞力供給が多少は期待出來るものとなりませう。此の問題に對して次の表（第六表）は現地の人々の勞力轉換の可能不可能の意志を表明してるものと見られます。

附近より勞力が得られるや否や

（第六表）

方面	地域	附近より勞力を多小は得られる	附近より勞力を殆ど得られない	不明
東横線	A、太尾	一二個所	一五個所	一九個所
東横線	B、綱島（日吉を含む）	二	一九	一
横濱線	C、小机	一五	二	二
横濱線	D、長津田	一〇		一
神中線	E、二俣川	九	九	
神中線	F、瀬谷	一〇	一一	
湘南線	G、富岡		二	
湘南線	H、金澤		一	二
東海道線	I、戸塚		一四	一
總計		五八	八〇	一八

上表よりして、湘南沿線、戸塚方面では現地調達は殆ど不可能であるとして他の地域に付ては、多少は現地調達の可能を知ることが出來ます。結局、横濱、横須賀の大都市を主要供給源とせねばなりません。

大都市を勞力供給源としました時間題となるのは、

通勤用交通機關の配備の如何です。

この點に關しては、本調査對象の諸地域がすべて交通機關沿線にあると言ふことが、先づ、それへの回答の冒頭をなしませう。

次で考慮きれるのは、大都市の通勤基點と、各地域との間を通勤するに要する時間でありませう。第七表、第八表はこの時間の問題に對する解答です。

各地域各個所より最寄りの驛まで出るに要する徒歩の時間

（第七表）

方面	地域	五分以内	十分以内	十五分以内	二十分以内	三十分以内	三十分以上
東横線沿	A、太尾	個所	個所	個所	個所	個所	個所
	B、綱島（日吉ヲ含ム）	二八	二六	七四	七四	二七	三四
横濱線沿	C、小机	九	四	三	一		
	D、長津田	二	二	二	二	三	
神中線沿	E、二俣川	一五	二	一			
	F、瀬谷	一一	六	三			
湘南線沿	G、富岡		二	四	五	二	
	H、金澤	三					
東海道線沿	I、戸塚	三	四	一一	三	二	
總計		個所 五三	個所 二八	個所 三五	個所 二二	個所 一七	個所 七

即ち全個所の七割迄は、十五分以内で又三割五分までは五分以内で交通機關をキャッチ出來ることが分ります。

次に通勤基點より各個所までの時間はどうなつてゐるかと申しますと、次表を御覽下さい。

最寄驛より横濱驛までに要する時間

（第八表）

方面	地域	十分以内	二十分以内	三十分以内	四十分以内	五十分以内	一時間以上
東海道線沿	I、戸塚	二三					
湘南線沿	G、富岡						
線	H、金澤			一三			
神中線沿	E、二俣川			一八			
線	F、瀬谷			五	一六		
横濱線沿	C、小机		一七				
線	D、長津田			一一			
東横線沿	A、太尾		二三	一三			
線	B、綱島		二一				
總計			八四	六三	一六		

全地域を通じ最高四十分以内を以て、通勤基地より到達し得る事が分ります。

地價及地代

以上に示して參りました如き、工業立地上の各種條件が揃つた後、最後的の決をなすものは、土地を手に入れる事の實現性の如何です。

即ち、土地を地主より「得られるか、得られないか」の問題と手を打つべき「地價及び地代はどの位か」の問題であります。

今地主が、その地所を手放すとした場合に、各個所の地價及び地代の大体の標準値段を知る必要があります、

この問題につき左の第九圖をそのパイロットたらしめませう。

（第九圖）

名地域に於ける地價、地代の標準

方面	地域	地價 圓／坪當 最低値	最高値	平均値	地代 錢／坪當 最低値	最高値	平均値
東横線沿	A、太尾	五圓	五〇圓	一〇—二〇圓	五錢	三〇錢	五—一五錢
東横線沿	B、綱島	一	三〇	一〇—一五	一〇	二三	一五—二〇
横濱線沿	C、小机	三	三九	一〇—二七	一	一一	四——九
横濱線沿	D、長津田	三	八	四— 六	不明		
神中線沿	E、二俣川	五	一四	八—一〇	二	八	三——五
神中線沿	F、瀬谷	二	五	三——四	一	四	二——三
湘南線沿	G、富岡	二五	二七	（不明ノモノ多シ）			
湘南線沿	H、金澤	一二	一八	一四—一五	七	一二	八—一〇
東海道線沿	I、戸塚	一	二〇	四—八	二	一九	六—一〇

各地域内に於て場所により價格には、相當な開ぎがありますが、最も大部分を占めてるのが右表中の平均値であります。又本表の最高最低値は絶体値段ではありませんから、實際問題に際して多少の變動あることを御承知願ます。細部については調査原票について詳しい記載があります。

工場適地を求められる方々へ

以上横濱市新市域の九地域に亘つて、その工業立地性の概略を示して參りましたが本調査に於ける調査原票には、各地域の各個所について次に記す如き、詳細な項目について細かに記載されてをります。

此パンフレットにより大體の方面地域及びその位置等を御存じになりましたらば、是非横濱市經濟部商工第二課開發係を訪れて調査原票を御覽になられるのが、最良の土地入手手段となりませう。

調査原票に於ける項目

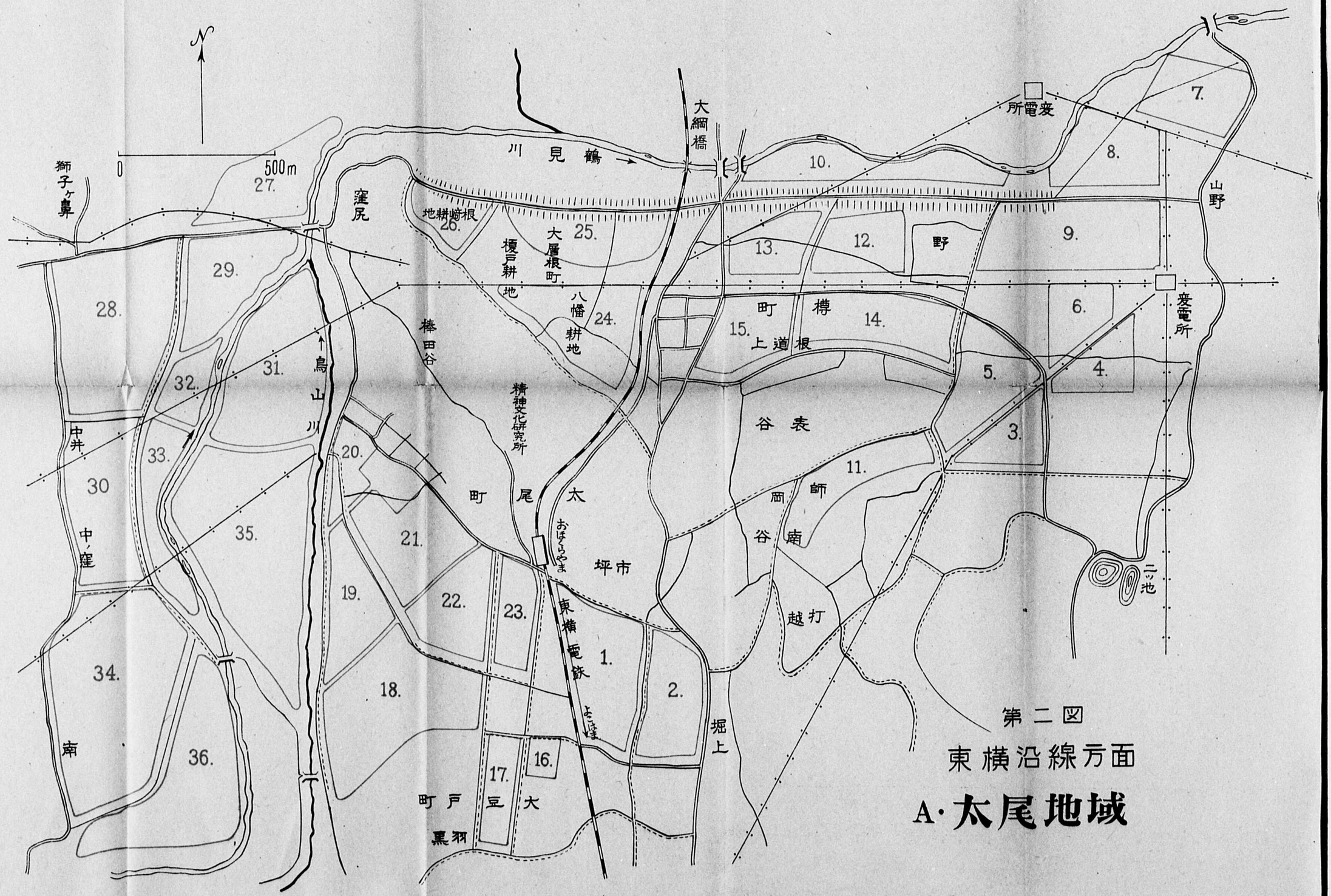
1、位置〔　　區　　町（通稱　　）何番地〕
2、面積〔約　　何坪（何米　×　何米）〕
3、現在の土地利用狀況〔空地（原）・畑地・田地・森地・施工地〕
4、地貌〔平坦地・斜面地・階段地・凹地・凸地・臺地・波狀地・開濶地・陰蔽地・濕潤地・乾燥地・砂地・埋立地・日向地・日蔭地〕
5、附近の狀況〔高級（中級・下級）住宅地・家並（櫛比・分散）〕
6、近接道路狀況〔附近を通過する幹線道路の名稱・その有無・適地より幹線へ出るまでの距離・幹線へ出るまでの道路の狀況（道路の有無・新道構築の要不要・鋪裝の有無・冬季に於ける狀況・雨期に於ける狀況・トラックの通　の可否・ダットサンの通過の可否）〕

7、交通機關〔原材料輸送に利用し得べき交通機關・通勤用交通機關（電車・バス）最寄驛までの徒歩時間・最寄驛より横濱驛までの所要時間〕
8、動力配備狀況〔附近に於ける高壓動力線（三、三〇〇V）及低壓動力線（二二〇V）の有無・配電端より受電端までの最短距離供給會社・ガスの有無・引込點への最短距離〕
9、配水狀況〔水道の有・無・引込點への最短距離、井戸の有無・鑿井の能不能・水質の良否・水量の多少・河流の有無・流水の多少・清水の清・濁・汚・揚水の便不便・排水の良否・下水道の有無・完不完〕
10、勞力供給〔附近より得られるや否や〕
11、所有者〔氏名・住所・分買の可否〕地價及地代〔最低・最高値段（坪當り）〕
12、其　　他
13、見取圖〔各個所の地形・交通狀況・動力配備狀況を記入せる略圖〕

以上の項目の細部的調査が全地域一六五個所の適地候補の各々についてなされてあります。

附圖を見られる上の注意

以下に各方面各地域に於ける工場適地個所を示した地圖を集めて置きました。
圖中に於て朱線で圍まれた部分が適地個所、數字は適地個所の番號であり、調査原票を見る際に知つておかねばならぬ番號です。
圖中‥‥‥‥は遠距離送電線路です
土地を調べられる方は、以上の記事より、方面と地域を決定きれた後、此附圖により適地個所を撰擇され、次で當經濟部商工第二課開發係に御出になつて調査原票を御覽になり、工場立地上の各種細部條件を御承知になるのが好適であります。



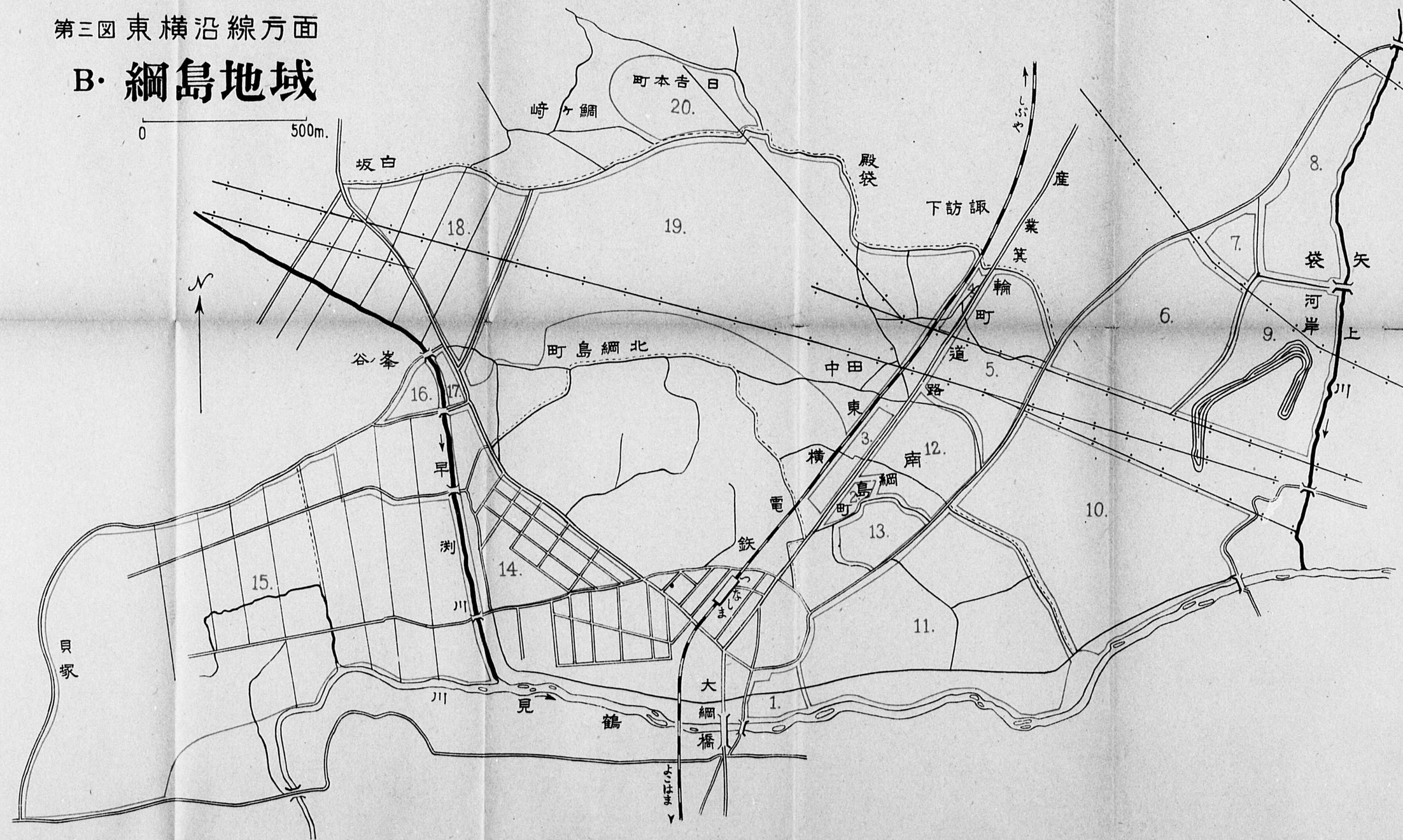
第二図

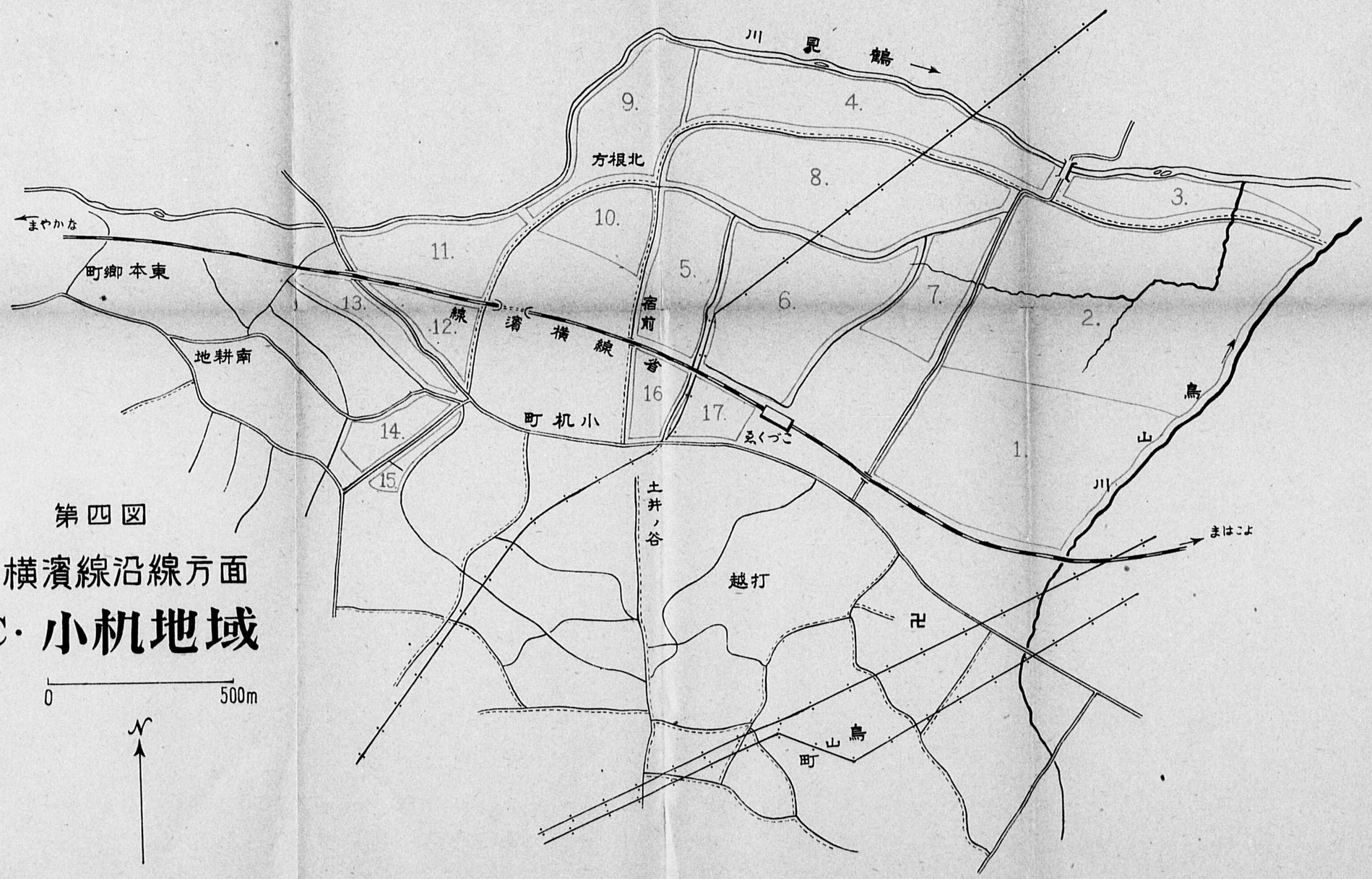
東横沿線方面

A·太尾地域

第三図 東横沿線方面

B· 綱島地域





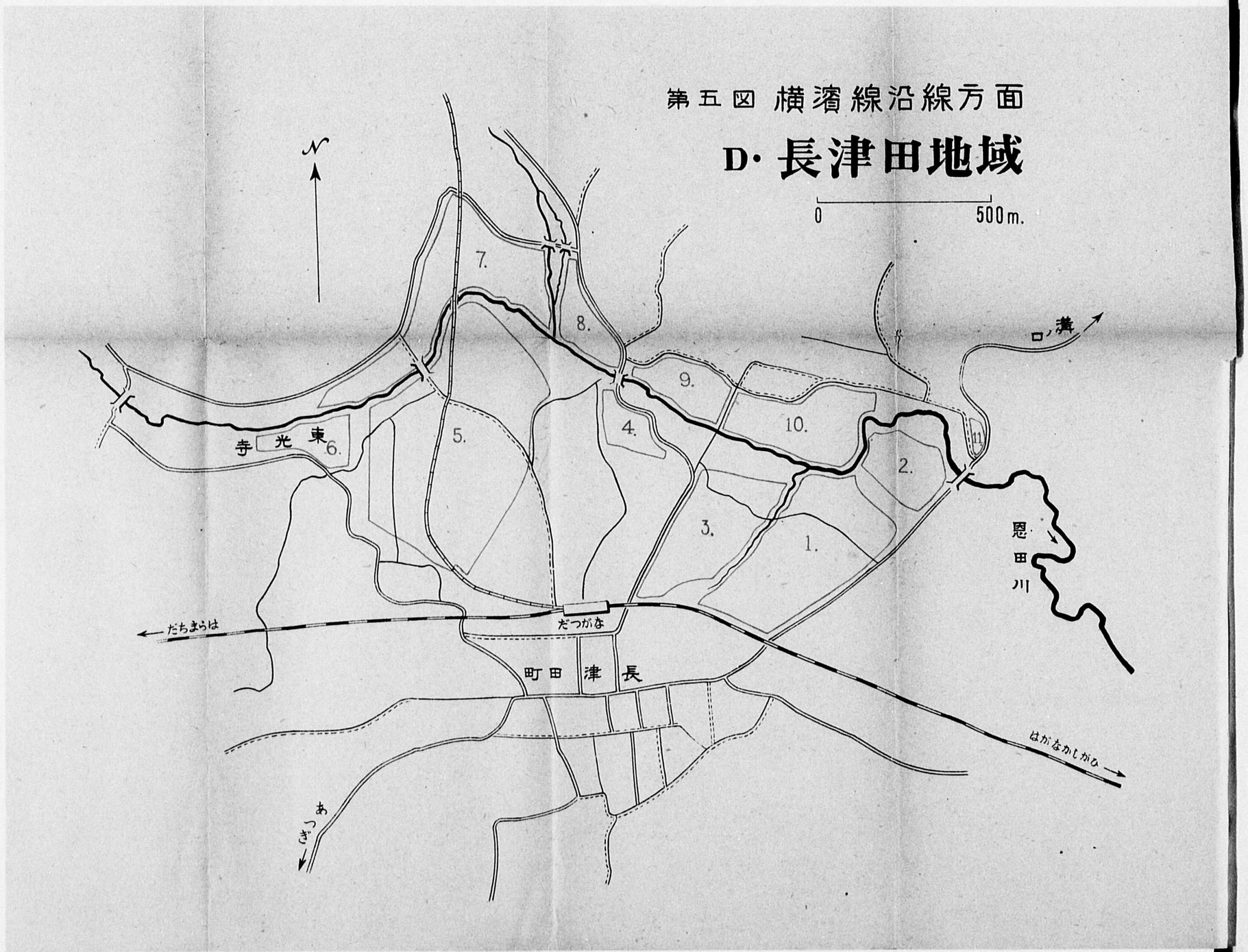
第四図

横濱線沿線方面

C・小机地域

第五図 横濱線沿線方面

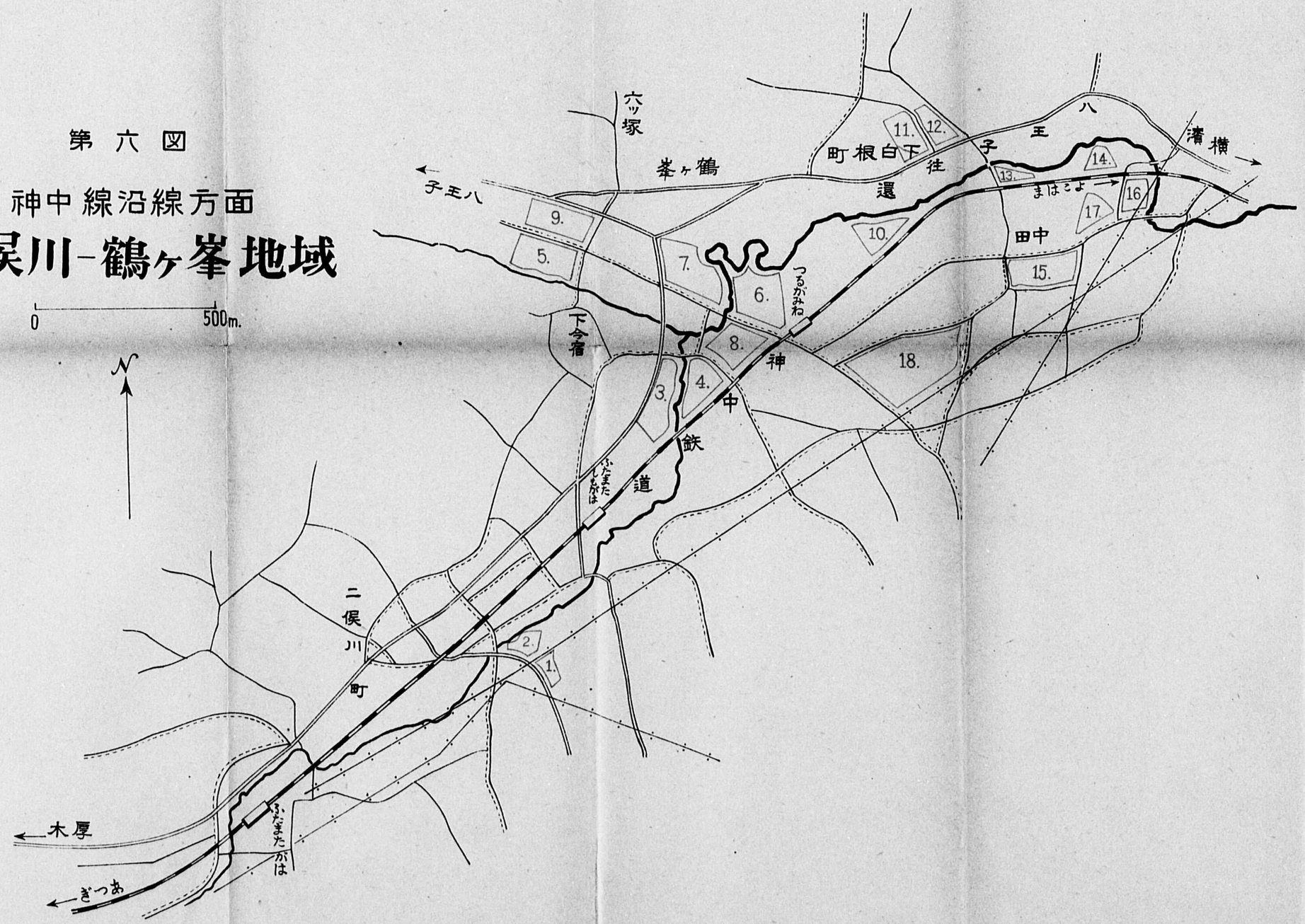
D・長津田地域



第六図

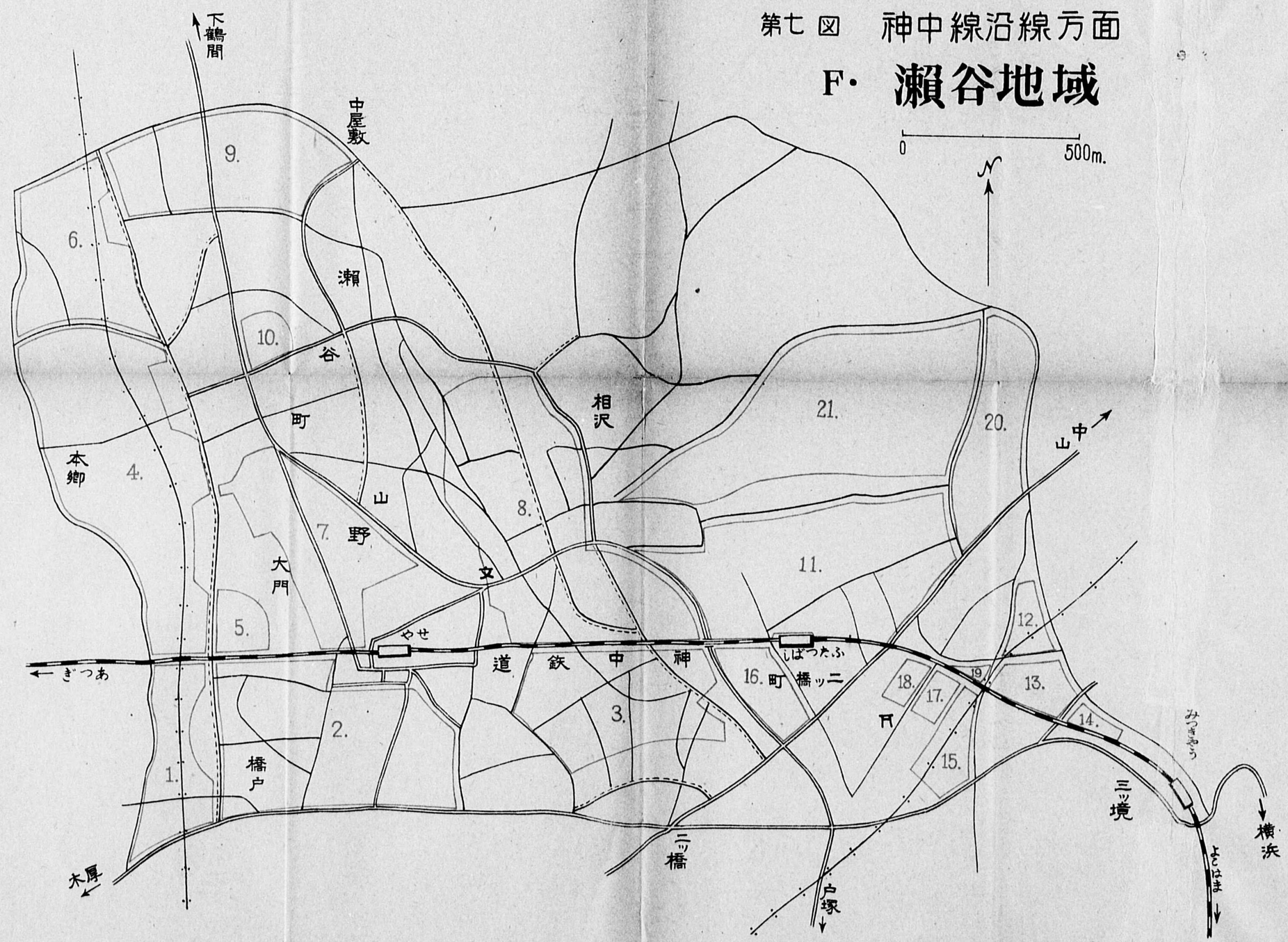
神中線沿線方面

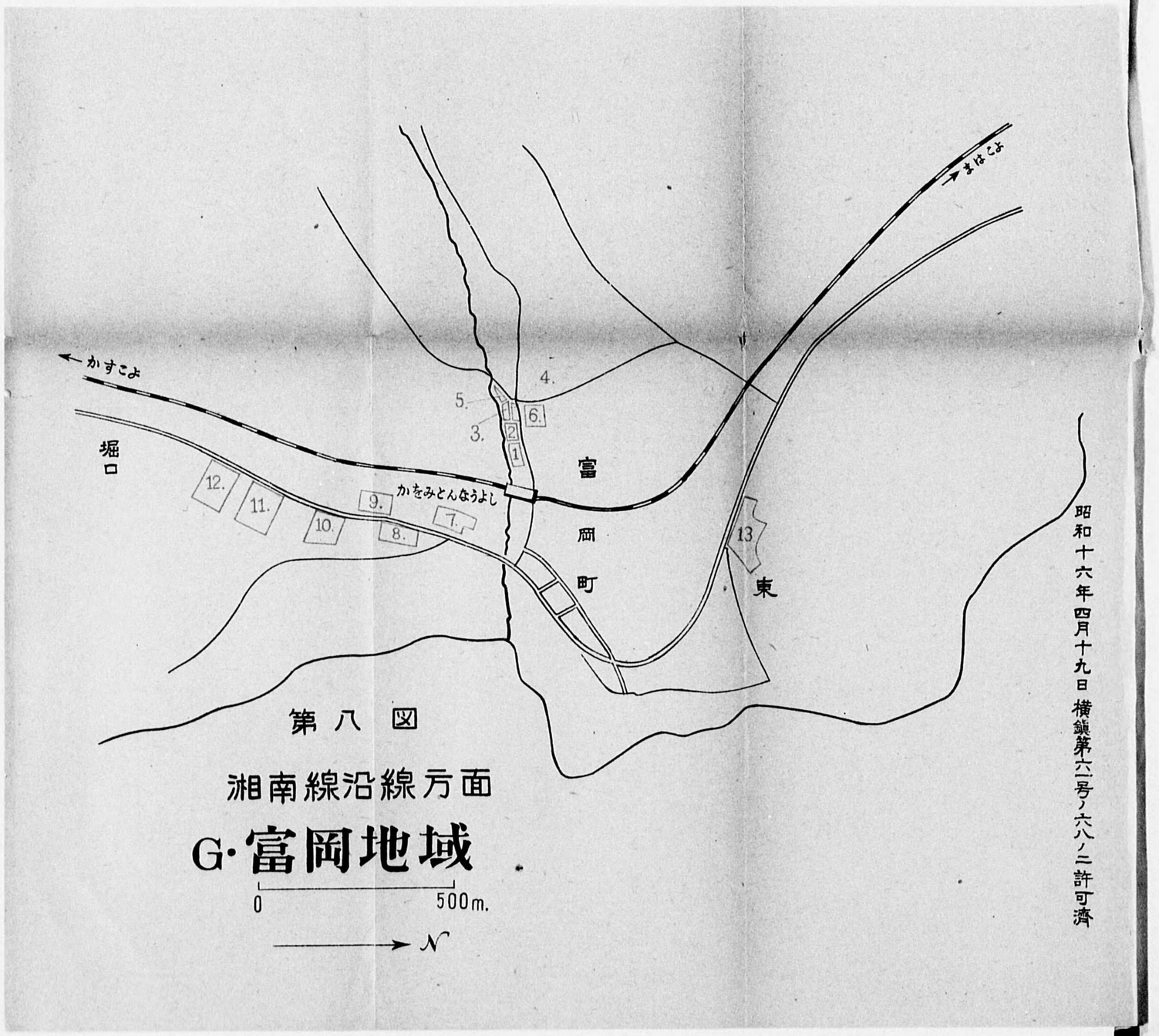
E・二俣川－鶴ヶ峯地域



第七図　神中線沿線方面

F・瀬谷地域





第八図

湘南線沿線方面

G·富岡地域

昭和十六年四月十九日 横鎮第六号ノ六八ノ二許可濟

第九図

湘南線沿線方面

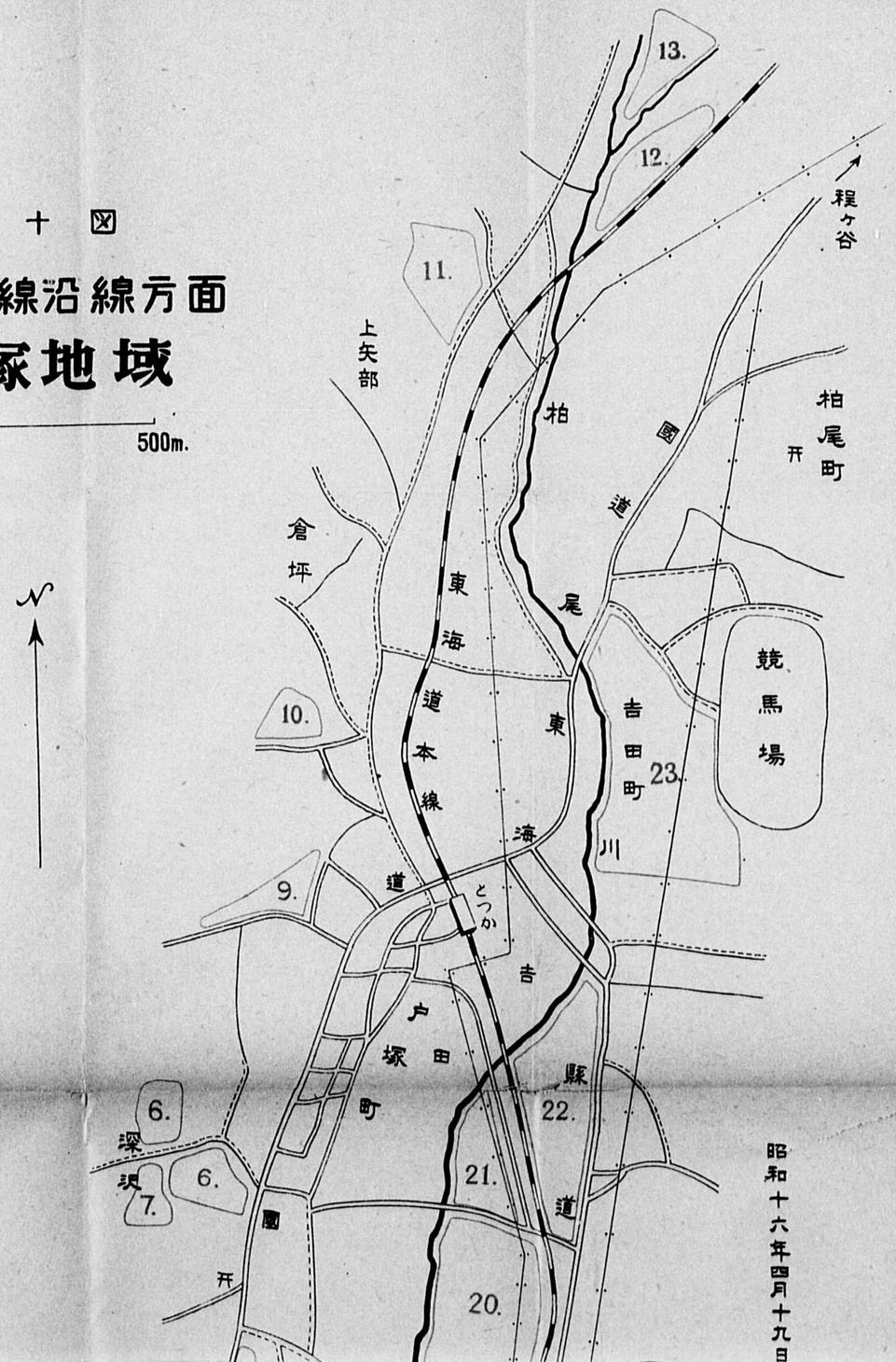
H·金澤地域

昭和十六年四月十九日横鎮第六一号ノ六八ノ二許可濟

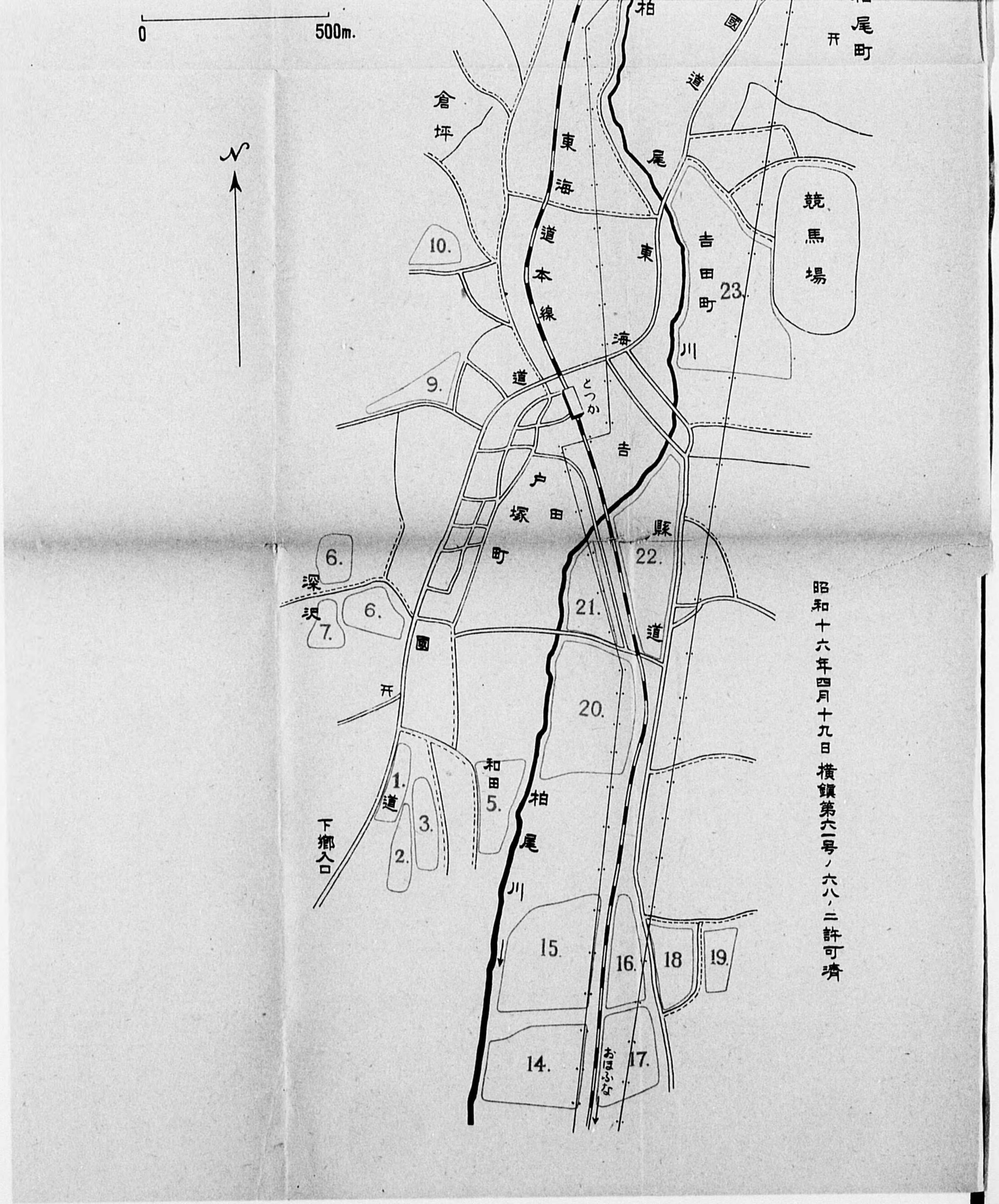
第十図

東海道線沿線方面
I・戸塚地域

0　500m.



昭和十六年四月十九日



昭和十六年四月十九日 横鎮第六一号ノ六八ノ二許可濟

917
248

昭和十六年五月一日印刷
昭和十六年五月五日發行
昭和十七年五月廿日再版
（非賣品）

編輯兼發行所　横濱市經濟部
電話長者町四（五〇三一）（五一三一）（五〇三五）（五一三五）

印刷人　横濱市中區尾上町五ノ八〇　竹本德次郎

印刷所　横濱市中區尾上町五ノ八〇　青山印刷所

—（寫謄代）—

917
248

終